

論文審査の結果の要旨

論文題名 19世紀西洋演劇におけるジャポニズム―「日本」の表象の変遷―

(論文審査の要旨)

[本論文の概要、構成]

本論文はジャポニズム/ジャポニスムと総称されてきた現象に関し、1856年の開国以降1900年代までのおよそ50年間を対象とし、演劇と大衆芸能の領域で分析する論考である。ジャポニズムは美術史の領域で美術工芸品の美学的な影響から分析される一方、舞台芸術の領域では19世紀アメリカ演劇におけるジャポニズム研究や20世紀初めの川上音二郎一座による海外公演の影響など、地域と対象を限定した成果が個別的にあげられてきたにすぎない。本論文の独自性は開国以降急速に広まる「日本人/日本らしさ」のイメージが何からどう生み出されていくのか、ヨーロッパとアメリカのジャポニズム演劇を対象として半世紀にわたるイメージの生成過程を明らかにした点にある。

本論文は序論と3章から構成されている。序論でまず「ジャポニズム演劇」の定義がなされたうえで、日本のイメージを扱われている欧米の作品38点が挙げられる。さらに序論では1872年のオペラ『黄色の姫君(*La Princesse Jaune*)』(サン＝サーンス作曲)から1930年のフィンランド・バレエ『オコン・フオコ(*Okon-Fuoko*)』(レーヴィ・マデトヤ作曲)まで、ヨーロッパおよびアメリカの舞台芸術(芸能)における「ジャポニズム演劇」上演の歴史が概説され、以後の議論における見取り図が示される。

[第1章の要旨]

本論文の第1章「ジャポニズム演劇前史―日本人表象の形成」では『ミカド』以前の日本表象が分析される。西洋世界には開国以前からオランダ東インド会社などを通じて日本(人)の情報が断片的に知らされており、開国後は万延遣米使節(1860年)や文久遣欧使節(1862年)の動向が欧米のメディアによって伝えられていた。本論文は日本人あるいは日本の物(習慣)に関する最初期の印象が詳細に記述されている。万延遣米使節団員たちの「知的な容貌」や「赤黒い肌」など、1860年の時点で「サムライ」たちの描写は現実のモデルに基づき事細かになされていたが、多和田氏はこれらの特徴がのちの演劇作品に登場する「日本(人)」のストック・イメージとは一致しないことを示す。

日本国の最初期の旅券(事実上の第1号から第27号まで)は曲芸師の隅田川波五郎以下27名の芸人集団に交付された事実が示唆するように、1866年5月23日に江戸幕府によって「海外渡航差許布告」が発令されると、海外のプロモーターに雇われた日本人の芸人集団が次々と海外へ飛び出していった。本論文の第1章第2節では鉄割福松一座やグレイト・ドラゴン一座な

ど少なくとも 8 つの芸人集団が 1867 年のパリ万博をはじめ、ヨーロッパとアメリカの各地で見世物巡業を行った事実が確認されている。

第 1 章の興味深い指摘は、万延遣米使節など現実の日本(人)に関する情報がそのまま「日本(人)」のイメージを形成するわけではなく、芸人たちによる見世物興行における日本的な要素が新聞記事や広告、チラシによって拡散していった結果、見世物小屋における日本風が『ミカド』以降の「日本らしさ」の原型になっていくという現象である。多和田氏によれば、西洋人にとって圧倒的に目にする機会が多かったであろう「日本的」な風景は舞台背景のフジヤマであり、典型的な日本人のイメージは小柄で俊敏な軽業師もしくは派手な衣装を着飾った(芸人が演じる)サムライであった。さらに日本語の聴覚的な印象もこの時期に形成され、「日本語」とは母音が目立ち、一定速度で一語ずつしゃべられる異国情緒豊かな言語であり、ジャポニズム演劇にもタイトル(『麗わしのサイナラ(*La Belle Sainara*)』)から登場人物(ミカド、ナンガサキ)、単語レベルの台詞(「ええ、姉さん(*Well, Ane-San*)」)が断片的に取り込まれていく現象がテキストに基づき具体的に指摘される。

[第 2 章の要旨]

第 2 章は『ミカド(*Mikado*)』(1885 年)における日本表象を分析した章であり、その第 1 節ではサヴォイ劇場とサヴォイ・オペラの解説がなされ、第 2 節ではこのオペレッタが企画される背景が論じられる。『ミカド』が上演された同じ年に、タンナケル・ブヒクロサン(日本名・田中武一九郎)という長崎出島のオランダ人医師と日本女性の間に生まれたハーフの男性が興行主となり、ナイツ・ブリッジの一角(現在のハロッズの目の前)で「日本人村(*Japan Village*)」のイベントを開催した。共催はリバティエ(日本グッズの専門店として始まった老舗百貨店)であり、リバティエは日本ブームを見越してパリとロンドンで売られていた和服を買い占め、連日新聞広告で和服を着た『ミカド』の登場人物の挿画を掲載していた。

第 3 節では『ミカド』に取り込まれた「日本らしさ」がまさしくサヴォイ劇場から徒歩で行ける「日本人村」で見学できるものであったことが論証される。『ミカド』そのものは同時代の典型的な諷刺喜劇で、当初、舞台設定はヘンリー 8 世の皇太子時代であったことが手記等の史料から判明している。それが「日本人村」の異国情緒が大きな話題を呼ぶと、皇太子とその許嫁は「ナンキプー」、「カティシャ」と国籍不明の人物に変更され、皇太子の父親は「ミカド」に変えられて、町人の髷をつけてけばけばしいサムライの衣装で登場するようになる。ヒロインも「学校帰りの三人娘」の一人「ヤムヤム(*Yum-Yum*)」に変更され、この女性三人組に「ゲイシャ」の表象が施されるようになり、ヒロインたちは華やかな和服を着て「ゲイシャ」風の品を作りながら歌い踊る。

多和田氏は「日本人村」に関する史料から、ギルバートをはじめとする『ミカド』制作関係者の手記や新聞記事、さらには同時代の証言記録まで広範囲にわたって調査し、『ミカド』のジャポニズムの起源を特定化する。第 2 章は、従来のテキスト分析では気づかれてこなかった視覚的・聴覚的な「日本(人)」表象を、「日本人村」と関連づけることにより具体化し、独自のアプローチによって演劇研究の分析対象を拡げることに成功している。文化史(表象史)の領域

においても、「フジヤマ、ゲイシャ、ハラキリ」など初期の「日本(人)」のストック・イメージとして挙げられてきたものが何を起源として、同時代の西洋人にどうイメージされていたのか、その内容が演劇テキストの具体例に基づいて指摘できたことは大きな成果である。

本論で指摘された一例を示せば、19世紀末の多くの西洋人にとって「ゲイシャ」は実際の芸者ではなく、1867年のパリ万博以来日本フェスティバルの呼びものであった和風喫茶コーナーの女性給仕人であり、『ミカド』以来、所作や衣装で日本情緒を醸しだしながら歌って踊る若い女性3人組がイメージされていた可能性が高い。ちなみに本論では「ハラキリ」のストック・イメージ化にも触れられており、多和田氏は世界各地を興行した川上音二郎の壮絶な「ハラキリ」場面からそのイメージの拡散が始まることを論証した。

[第3章の要旨]

第3章「ベラスコと『蝶々夫人』」は『ミカド』以降のジャポニズム演劇の展開を、日本文化の受容にとりわけ敏感であったアメリカを中心に分析したものである。『ミカド』はヨーロッパ・アメリカ各地で繰り返し再演されており、第1節は現存する史料からアメリカにおいて初演の翌年からボストンとサンフランシスコで計6つの劇団によって上演され、さらに『ミカド』上演とともに「日本人村」や「日本パーティー(Japanese Party)」(事実上の和風コスプレ・パーティー)が開催されるなど日本ブームが起きていたことを確認する。本節はこの日本ブームの中、『ミカド』の最初の翻案版『ミッキー・ドゥー(Mickey-Doo)』が minstrel・ショーというアメリカ独自の演劇様式で生み出された現象に注目する。minstrel・ショー自体台本のない即興演芸であるため議論が難しい対象であるが、本節は現存するチラシや記録をもとに、『ミッキー・ドゥー』が黒人に扮した白人芸人によって「サムライ」の所作をするなど、『ミカド』の日本表象がパロディー化される見世物であったことを明らかにする。

第3章第2節は西洋の既存の演劇(文学)様式に「日本(人)」のストック・イメージが上書きされるという「ジャポニズム演劇」の核心的な現象を、19世紀のアメリカで流行していた感傷小説や感傷的メロドラマと関連させつつ指摘する。イタリア・オペラの代表作であるプッチーニの『蝶々夫人』(1904年)には原作があり、もともとはジョン・ルーサー・ロングの短編感傷小説「蝶々夫人」(1898年)を劇作家・演出家デイヴィッド・ベラスコが演劇版(1902年)に翻案し、その演劇版をさらにプッチーニがオペラ化したものである。第2節は「ジャポニズム演劇」が1900年頃から悲劇でも登場し始める現象を指摘したうえで、『蝶々夫人』翻案版が生み出される過程で原作の小説に重ね塗りされる演劇版の「日本(人)」表象をテキストに基づき詳細に検討している。

第3節はジャポニズム演劇最初期の作品であるエルヴィリ作『麗わしのサイナラ』の英訳版がブロードウェイで上演され続け、翻案版が登場するプロセスに注目する。この節では日清戦争や日露戦争以降西洋社会で日本の情報が激増するにつれて、「日本(人)」表象の仕方が登場人物名やその発音、衣装や小道具などにおいて格段にリアリスティックになる傾向が『麗わしのサイナラ』の英訳版上演や翻案作品『江戸の花』(1898年)の分析を通じて具体的に指摘される。

【総括、評価】

多和田氏は劇団主催者であり演出家でもある経歴を生かし、「ジャポニズム演劇」を文学研究のアプローチに加えて舞台芸術という視点から聴覚的・視覚的情報にも目配りしつつ、時代のおよび地域的に広い範囲でテキストと関連資料を収集し分析をおこなった。本論文は演劇作品論および演劇史の研究において視覚的・聴覚的演出も考慮した新たな解釈を提示するものである。さらに初期の「日本(人)」表象の具体的な生成過程を分析するなど、東西文化交流史の領域で重要な成果をもたらしている。とりわけ審査委員から評価されたのは、「日本人村」などのイベントとジャポニズム演劇との影響関係に着目することにより、文字化されていない聴覚的・視覚的情報の存在を指摘でき、演劇研究の領野を大きく広げた点である。以上の点で、審査委員会は全員一致で本論文が博士(表象文化学)を授与されるのにふさわしいと判断した。

| | | |
|--------|---------|-------|
| 論文審査主査 | 中野 春夫 | 教授 |
| | ティエリ マレ | 教授 |
| | 鴻 英良 | 非常勤講師 |